

2017年9月

有事の円高

公益財団法人 国際通貨研究所
名誉顧問 行天豊雄

このところ国際金融情勢は不思議な程静かである。つい一、二ヶ月前迄は FED が堅調な景気回復を背景に、利上げと資産圧縮を本格的に開始するだろうという強気の観測が優勢だった。そうなると、ECB のドラギ総裁もいよいよ来春からの出口戦略を予告するだろう。日銀も何時迄も出口について黙っているわけにも行かなくなるのではないか。途上国はまたぞろ資本流出を心配しなければならなくなる、等々の憶測が市場を飛び交っていた。

ところが最近はずっかり様変わりである。イエレンもドラギも当面の金融政策についてはすっかり具体性が無くなり、中央銀行とは余り関係の無いような話ばかりしている。日銀は相変わらず前にも後にも、上にも下にも動けない仮死状態である。世界的にマクロ経済は拡大してはいるが、熱気を感じさせるような雰囲気は無い。どうも最近の世界の中央銀行の大人しさを見ると、「いま世界経済にとって一番大事なものは中央銀行ではない」という醒めた想いがあるようだ。その通りだろう。

しかし、世界が静かな訳では決してないのである。米国で、中国で、アジアで、中東で、欧州で、成行きによっては世界史を動かすかも知れないような出来事がうようよしている。金融市場の静けさがむしろ不気味な感じさえするが、市場参加者にとって見れば、何か起こるかも知れないが、さりとて動きようがないというのが本音だろう。

「有事の円高」という言葉がある。国際的に何か地政学的な混乱が起ると円が買われると云うのである。正直云ってこれ程論理的な説得力に欠けた言葉はないと思えるのだが、一般的な解説は「地政学的な有事になると、相対的に政治的にも経済的にも安定している日本が評価されて、円が買われる」ということで、多くの日本人はそれに納得しているらしいのである。現に、自己達成的予言の典型で「有事の円高」が発生することが珍しくない。

しかし、「有事の円高」を信じている人は二つの前提に立っている。第一は、「有事」とは日本に関係のない「有事」だということであり、第二は、この言葉は日本への褒め言葉ではないと思っていることである。

こういう心理が日本人の間に定着してしまうことに私はいささかの不安を憶える。第

一に、我々は有事が日本にも起り得ることを忘れてはいけない。第二に、我々は自国通貨の為替相場について、何時でも長期的視野に立った政策判断を忘れないようにしなければならないからである。

(株式会社マネーパートナーズ ホームページへ寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2017 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>